

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS

No.130 August 2012

新学術領域研究

◆ 第7回国際シンポジウム開かれる ◆

7月4～6日、センター大会議室で第7回新学術領域国際シンポジウム「帝国から地域大国へ、国家と非国家の間で」が開催されました。これは、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」における最後の国際的な催しです。主に第2班（内政）と第5班（社会）が担当しました。4日には、国際若手ワークショップとセオドア・ウィークス・センター特任教授の記念講演がありました。若手ワークショップの3ペーパーは、非承認国家問題と正教会の分離独立に関わるもので、シンポ全体の内容と呼応していました。



活発なフロアのような

初日の基本コンセプトは「トランスナショナリズム」でした。これは、地域大国の強さは国別に政治・軍事・経済資源を測るようなやり方ではわからず、むしろトランスナショナルなアクターをうまく利用しているか、それらと協業しているかが重要であるという第5班の基本思想から導き出されたものです。「帝国と政治地理」、「宗教政治とトランスナショナリズム」、「地域大国の周縁と『近隣外国』を跨ぐ紛争」の3セッションがおこなわれ、9ペーパーが提出されました。

2日目の基本コンセプトは「権威主義体制」でした。中国はまだ古典的権威主義体制ですし、CIS諸国の大半では競争的権威主義体制が成立しています。1990年代に盛んだった民主化論は、古典的権威主義体制から競争的権威主義体制への移行を逸脱としか見ませんでした。今こにちでは競争的権威主義体制は、それ自体が実証研究の対象として認められています。「競争的権威主義体制の比較：理論的挑戦」、「体制転換か、それとも体制動態か？政治的揺れ戻しの比較研究」、「地域大国の権威主義的な指導者と言説」の3セッションがおこなわれ、9ペーパーが提出されました。



パネルのひとつ

若手シンポも含めた報告者の国別内訳は次のとおりです（国籍ではなく勤務地別）。日本 10、アメリカ 7、ドイツ、イスラエル、ルーマニア、ウクライナ、オーストラリアが 1 人ずつ。内容上のバランスについては、パキスタンから来るはずだった研究者が 1 人キャンセルしたこともあり、南アジアに言及したペーパーが 3 本にとどまったことが残念でした。

なお、シンポの後、外国人ゲストのうち希望者は、大阪大学と早稲田大学に分かれてセミナーをおこないました。[松里]

新学術領域研究第 7 回国際シンポジウム 帝国から地域大国へ、国家と非国家の間で（プログラム）

From Empire to Regional Power, between State and Non-state

日時：2012 年 7 月 4 日（水）～ 6 日（金）

場所：北海道大学スラブ研究センター大会議室（403 号室）

2012 年 7 月 4 日（水）

15:00-16:50 International Workshop for Junior Scholar

司会：Yoko Aoshima, Aichi University

報告者：Keiji Sato, Hokkaido University “Social and Political Movements in South Ossetia, Southern Moldova (Gagauzia), and Transnistria at the End of the Soviet Era: A Prelude to Violent Conflicts along Ethnic Lines?”

Dareg Zabarah, Humboldt University “Autocephaly: A Delayed Transition from Empire to National State?”

Nikola Mirilovic, University of Central Florida “A Preliminary Theory of Contested International Recognition of New States: The Case of Kosovo”

17:00-18:00 Commemorative Lecture

Theodore Weeks, Southern Illinois University “City, Cultures, Empire: Vilnius in the Russian Empire and USSR”

7 月 5 日（木）

9:30 Opening Speeches

9:45-12:00 Session I Empires and Political Geography

司会：Ozan Arslan, Izmir University of Economics

報告者：Charles King, Georgetown University “Can Seas Have Histories?”

Jin Noda, Waseda University “Empires and Steppe: A Comparative Study on Qing and Russian Empires”

Moshe Gammer, Tel Aviv University “Land Made of Copper, Men Made of Steel: The Case of Russia and the Caucasus”

討論者：Toshiaki Ohji, Emeritus, Kyoto University

13:30-15:30 Session II Religious Politics and Transnationalism

司会：Kimitaka Matsuzato, Hokkaido University

報告者：Norihiko Naganawa, Hokkaido University “Drawing Russia as a Muslim Power? The Hajj from Tatarstan and Daghestan in the Post-Soviet Era”

Dumitru Cotelea, Babes-Bolyai University, Romania "The Issue of the Russian Canonical Territory between Ecclesiology and Geopolitics"

Taro Tsurumi, Hokkaido University "Defending Monarchism for a Plural Society: Daniel Pasmanik, a Russian Jewish Transnationalist"

討論者: **So Yamane**, Osaka University

15:45-17:45 Session III Conflicts Spanning the Regional Powers' Peripheries and "Near Abroad"

司会: **Keiji Sato**, Hokkaido University

報告者: **Arsene Saparov**, Michigan University "Arbitrary Borders? The Logic of the Bolshevik Boundary-Making in the South Caucasus 1921-1925 Abkhazia, South Ossetia, Nagorno-Karabakh"

David Brophy, Australian National University "Russian Muslim Writing on Xinjiang in the Pre-revolutionary Period"

Kazuya Nakamizo, Kyoto University "Peripheries Creating the 'Indian' Nation: The Border and Muslim Problems Revisited"

討論者: **Keiichi Kubo**, Waseda University

7月6日(金)

10:00-12:00 Session IV Competitive Authoritarianism: Theoretical Challenges

司会: **Nobuo Shimotomai**, Hosei University

報告者: **Barbara Junisbai**, Pitzer College "Unpacking the 'Competition': Variation in Political Opposition under Competitive (and Not-So-Competitive) Post-Soviet Authoritarianism"

Ayame Suzuki, Fukuoka Women's University "Strong Institutions and Weak Incumbents: Asian Competitive Authoritarianism as an Exception?"

Fumiki Tahara, University of Tokyo "Competitive Client, Faithful Agent, or Lonely Principal? The Political Implications of Village Leadership in India, Russia and China"

討論者: **Atsushi Ishida**, University of Tokyo

13:30-15:30 Session V Regime Change or Regime Dynamics?: A Comparative Study of Backlashes

司会: **Yang Cheng**, East China Normal University

報告者: **Cory Welt**, George Washington University "Institutional Reform and Single-Party Rule in Georgia"

Olexiy Haran, Kievo-Mohyla Academy University "From the Orange Revolution to Russian Model of 'Stability'?"

Tomohiko Uyama, Hokkaido University "Party Politics and Premier-Presidentialism in Kyrgyzstan after the Second Revolution: Order in Disorder"

討論者: **Hirotake Maeda**, Tokyo Metropolitan University

15:45-17:45 Session VI Authoritarian Leaders and Discourse of Regional Powers

司会: **David Wolff**, Hokkaido University

報告者: **Tang Liang**, Waseda University "One Party System's Strategy for Survival: Promotion and Screening of Political Elites in China"

Gulnaz Sharafutdinova, Miami University "The Limits of Political Realism and Cynicism in Contemporary Russia"

Atsushi Ogushi, Osaka University of Economics and Law "The Limitation and Failure of Dominant Party Building: Russia and Ukraine in Comparative Perspective"

討論者: **Naoya Izuoka**, Keio University

◆ 第6回全体集会開かれる ◆

7月7日(土)の午後には、新学術領域研究第6回全体集会「最終成果出版の準備報告会」が開かれました。この報告会は、今年1月に開かれた前回の全体集会に引き続き、プロジェクトの最終成果として出版が予定されている本の原稿読み合わせとなるものです。今回は、当領域研究の1班、4班、6班からそれぞれ1組ずつ選ばれた報告者が、これまでに用意した原稿をもとに、会場に集まった40名ほどの前で報告をおこないました。報告の前には、それぞれの班の研究代表者が、班ごとに構成される本の概要を説明し、報告内容と合わせて会場から質疑応答を受けました。各報告とも独創的かつインパクトのある研究報告で、フロア全体で熱い議論が起きました。なお、当領域研究の全体集会としては、今回で最終となります。[後藤]

新学術領域第6回全体集会「最終成果出版の準備報告会」

日時：2012年7月7日(土) 13:30～18:30

場所：北海道大学スラブ研究センター4階大会議室(403号室)

プログラム

13:30～15:00：第4巻(第4班)

司会：宇山智彦(北海道大学)

報告者：池田嘉郎(東京理科大学)「第一次世界大戦と帝国の遺産」

15:15～16:45：第3巻(第1班)

司会：岩下明裕(北海道大学)

報告者：兵頭慎治(防衛研究所)「プーチン・ロシアの国家発展戦略：多極世界下の米中印露関係」

17:00～18:30：第6巻(第6班)

司会：望月哲男(北海道大学)

報告者：高橋沙奈美(日本学術振興会特別研究員)、前島訓子(名古屋大学)、小林宏至(首都大学東京)「地域大国の世界遺産：宗教と文化財」

◆ 新学術領域研究総括シンポジウムの予告 ◆

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」は、今年度が最終年度となっています。昨年度までの3年間は、毎年夏、冬に国際シンポジウムを開いてきましたが、今年度は冬の国際シンポジウムに代えて、日本語による総括シンポジウムを開きます。本領域研究の成果を広く発信し、総括することがねらいです。早稲田大学の現代中国研究所が共催となってくださり、期日と場所は以下のように決まっています。

期日：2013年1月26日(土)

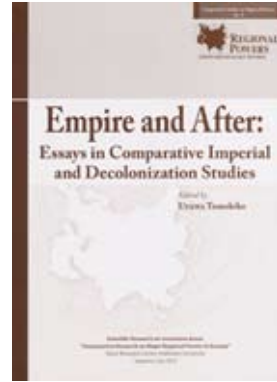
場所：早稲田大学 国際会議場 井深大(いぶかまさる)記念ホール

内容は、若手主体のセッション、各計画研究班からの報告、総括ラウンドテーブルとなる予定です。プログラムは10月頃までに確定・発表されます。本領域研究の関係者以外の皆様も、是非予定に入れておいてください。[田畑]

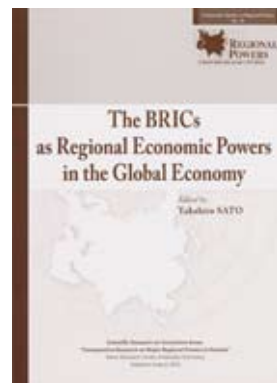
◆ 『比較地域大国論集』第9号、10号刊行 ◆

新学術領域研究から非定期で刊行されている『比較地域大国論集』の第9号と第10号が相次いで発行されました。

第9号の宇山智彦編 *Empire and After: Essays in Comparative Imperial and Decolonization Studies* は、第4班「帝国論」の研究テーマである帝国の歴史と、その崩壊・再編プロセスの比較論集となっています。アレクサンダー・モリソン論文および宇山智彦論文は、ロシア領中央アジア、英領インドなどの歴史を通して、近代帝国を比較する方法と視角を検討し、福田宏論文は帝国の狭間に置かれた中欧小国群の生存戦略を論じます。また、2010年3月8日～9日に東京大学でおこなわれたワークショップ“New International Order of Asia and Regional Powers in the 1950s and 1960s”に提出された5本の報告ペーパーは、脱植民地化と冷戦の関係、特に帝国崩壊後に生まれた独立諸国を味方につけるために諸大国がどのような政策やレトリックを用いたかを分析しています。全体としてこの論集は、帝国および脱植民地化を比較する際に、さまざまな地域間の関係を共時的に見ることが重要であることを論証していると言えます。



第10号の佐藤隆広編 *The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy* は、第3班「経済」研究グループを中心に、2011年12月26日～27日にジャワハルラル・ネルー大学 (JNU) でおこなわれた第5回日印対話“*The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy*”の報告の中から、10本の論文をまとめたものです。この論集では、BRICs各国の経済的な台頭とその固有性を、厳密な定量的分析によって検証しています。金野雄五論文は貿易自由化をロシア・中国・インドで比較し、星野真論文は国内地域経済の収束性をBRICs各国で比較し、新興国の経済発展モデルの固有性の抽出を試みています。そして、8本の論文は、政治経済・産業・生産性・マクロ経済の視点から、近年飛躍の目覚ましいインド・中国それぞれの経済成長を考察しています。また、多くの論文が最先端の分析手法を用いており、自らがフィールドとする国の分析への応用という点においても、この論集は示唆に富んでいるといえましょう。



いずれも、収録内容は新学術領域研究ウェブサイトの出版のページからダウンロードできます。[宇山／星野]



グローバルGCOE

◆ 第7期博物館展示開始 ◆



サーミの民族衣装

GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」は、北大博物館における企画展示を通じて、境界問題を視覚を通じて社会に広く発信していますが、5月25日からは、第7期展示「北極圏のコミュニケーション：境界を越えるサーミ」が始まりました。

先住民族としてEUから公式に認定されているサーミ人は、伝統的居住地をノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアの4カ国の国境によって分断されています。展示では、フィンランド北部に暮らす3つのサーミ集団（北サーミ、イナリ・サーミ、スコルト・サーミ）に焦点をあて、その歴史や生活文化をご紹介します。先住民問題としてアイヌとの共通点があり、また、折からフィンランドセンターが北大キャンパス内に置かれたこと等、本展示の道内での開催は時宜にかなったものと言えましょう。

本展示と連動した連続市民セミナーも開講中です。展示、セミナーとも無料でどなたでも自由に参加いただけます。[藤森]



セミナーの様

市民セミナー開講日程

- ・5月26日（土）「フィンランドにおけるサーミ文化の現状」
タルモ・ヨンパネン（Tarmo Jomppanen、シーダ博物館長）
- ・6月16日（土）「サーミとアイヌの交流：1980's 幕開けとその意義」
井口光雄（北海道フィンランド協会会長）、中村齋（アイヌ民族博物館元館長）
- ・8月18日（土）「映像を通じてみるサーミの文化（1）」
橋本晴子（スノーコレクティブ代表）
- ・9月15日（土）「スコルト・サーミが抱える政治・教育の課題と挑戦（通訳付）」
ヴェイコ・フォードルフ（スコルトサーミ評議会代表）
- ・10月20日（土）「サーミの人々との交流を通じて」

- 川上将史（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構）
- ・ 11月17日（土）「映像を通じてみるサーミの文化（2）」
橋本晴子（スノーコレクティブ代表）
 - ・ 12月15日（土）「サーミ展示：境界を越える学術・文化交流の創出」
マルティナ・テュリセヴァ（フィンランドセンター北海道事務所所長）

◆ 第3回サマースクール・プログラムの開催 ◆

北大 GCOE「境界研究の拠点形成」は、若手研究者の育成・教育と国際化を目的の一つに掲げており、毎夏、短期集中の教育プログラムを実施しています。本年度も、7月31日～8月7日にわたり、「アジアの境界：中央アジア・東南アジア・日本・韓国」と題した教育プログラムをスラブ研究センターでおこないました。履修者は、国籍ベースで、ロシア、カザフスタン、中国、インド、フィンランド、ルーマニア、シンガポール、フランス、日本と9カ国に及び、連日、講師との間で英語による活発な質疑がおこなわれました。特に、日本の境界問題に関し、講義日が2日にわたり生まれ、履修者の強い関心を引きました。本サマースクールを通じ、境界研究ネットワークが海外若手研究者の間にも一層拡充されることとなります。併せて、査読誌 *Eurasian Border Review* への投稿も期待されます。[藤森]



サマースクールに参加した方々

◆ *Eurasia Border Review* 特別号の刊行 ◆

GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」の英文誌 *Eurasia Border Review* で特別号“China’s Post-Revolutionary Borders: 1940s-1960s”が発行されました。この特別号では、現在ユーラシア冷戦史のプロジェクトを進めているウルフ氏（センター）が編者を担当しており、冷戦期における中国国境に焦点を当てた7本の論考が収められています。GCOE のホームページからダウンロードして読むことができます。

<http://borderstudies.jp/achievements/public3/ebrs.htm> [福田]



研究の最前線

◆ 第1回スラブ研究センター公開講演会開催される ◆



公開講演会のようす

2012年6月29日、第1回スラブ研究センター公開講演会が北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟で開かれました。センターは、国際シンポジウムをはじめ国内外の研究者を招いて先端的な研究を議論する場を多く設けており、また特定のテーマに沿って講師陣を集めた公開講座も開いていますが、専任教員が日常的におこなっている研究

の成果を一般向けに話す機会は必ずしも多くありません。そこで、専任教員の最新の研究内容やスラブ・ユーラシア地域の最新事情を、市民・学生・ジャーナリストなどに向け広く公開するための企画として、公開講演会を定期的で開催することにしました。

第1回は「中央アジアから見る世界の『今』：『民主化』とユーラシア国際秩序再編」と題して、宇山智彦が講演しました。「アラブの春」で民主化が再び注目されているものの、世界的には1990年代末以降民主化が停滞しており、中央アジアでも大勢としては権威主義体制が継続する中で、部分的な民主化の試みや衝突が起きていること、ロシア、中国、アメリカの進出に対して中央アジアの小国も自らの国益を積極的に追求していること、グローバル化しても決して均質化しない世界の中で、国家間・社会層間の格差や体制の違いを利用した駆け引きが繰り返されている様子が、中央アジアを例によく見て取れることなどを語る内容でした。講演会には約60人が出席し、熱心な質問が出されました。

センターは今後、年4回の定例公開講演会と、不定期の臨時公開講演会を開いていく予定です。9月に野町素己氏、12月に望月哲男氏、2013年3月に岩下明裕氏の講演をおこなうことを計画中で、詳細は決まり次第ホームページ等で発表します。[宇山]

◆ 2012年度科学研究費プロジェクト ◆

2012年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです。[編集部]

基盤研究 (A)

ウルフ ディビッド 北東アジアの冷戦：新しい資料と展望 (2009-12年度)

基盤研究 (B)

家田 修 大規模環境汚染事故による地域の崩壊と復興：チェルノブイル、アイカ、フクシマ (2012-15年度)

宇山 智彦 近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史 (2009-12年度)

原 暉之 国境の植民地サハリン (樺太) 島の近代史：戦争・国家・地域 (2010-13年度)

松里 公孝 競争的権威主義体制の比較研究 (2012-14年度)

基盤研究 (C)

- 木山 克彦 極東地域における鞆まっかつに関する考古学的研究 (2008-12 年度)
高本 康子 近代日本の画像メディアにおける「喇嘛教」表象の研究 (2012-16 年度)
宍内勇津流 ロシア正教の教義確立とフィラレート (2010-12 年度)
長縄 宣博 帝国とメッカ巡礼：ロシアのムスリム地域の視点から (1865～1914) (2010-12 年度)

挑戦的萌芽研究

- 越野 剛 ロシア語文化圏の東西周縁の文学における戦争の語りの比較研究 (2012-14 年度)

若手研究 (B)

- 井上 暁子 ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学と移民文学の比較研究 (2011-14 年度)
草野佳矢子 帝政ロシアの統治官僚と地方自治：第一次革命前ロシア内務省の組織と活動 (2010-12 年度)
小松 久恵 雑誌に見る「近代」：ヒンディー語女性雑誌におけるインド近代表象 (2010-13 年度)
野町 素己 カシュプ語統語論の総合的研究 (2010-12 年度)
花松 泰倫 アムールオホーツク生態系の陸海統合管理とラムサール条約の適用可能性 (2012-13 年度)
平山 陽洋 第1次インドシナ戦争期の北ベトナムでの総動員体制の構築と冷戦の影響をめぐる研究 (2011-13 年度)
前田 しほ 20世紀後半ロシア文化における戦争の記憶表象についてのジェンダー研究 (2012-14 年度)

研究活動スタート支援

- 加藤美保子 プーチン以降のロシアのアジア太平洋政策：台頭する中国との協調と自立の観点から (2011-12 年度)
佐藤 圭史 旧ソ連空間における非承認国家問題 (2011-12 年度)

学振特別研究員奨励費

- 菊田 悠 中央アジア定住地帯の秩序の再編成プロセスにおけるイスラーム聖者と聖性の役割 (2011-13 年度)
高橋美野梨 境界研究から見る「北極」：デンマークの北極圏戦略と媒介項としてのグリーンランド (2012-14 年度)
中山 大将 日本帝国崩壊後の樺太植民地社会の変容解体過程の研究 (2012-14 年度)
宮崎 悠 公共宗教と国民形成の政治力学：ポーランド・ナショナリズムとカトリック教会 (2010-12 年度)
森下 嘉之 国民国家の形成期における地域社会の変容と住民：20世紀中東欧を事例に (2011-13 年度)

研究成果公開促進費 (学術図書)

- 麻田 雅文 中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」1896-1935 (2012 年度)
菊田 悠 ウズベキスタンの聖者崇拜 (2012 年度)
森下 嘉之 近代チェコ住宅社会史 (2012 年度)

◆ 公開講座 ◆

ユーラシアの自然と環境は誰が守るのか 開かれる

今回の公開講座は環境をテーマに、国境をまたぐ国際河川の問題を取り上げました。いうまでもなく、自然環境は本来、社会や政治の変化と無縁ですが、現実には大きな影響を受けています。ユーラシアにおける自然環境は、体制変動の結果として、今どうなっているのか。誰がそこに目を向け、誰が自然環境を守っていくのか。

公開講座では5月7日から5月28日まで、週に二回の間隔で、上記のような視角から7名の講師が、西はヨーロッパのドナウ川水系から始まり、中央ユーラシアのアラル海やバルハシ湖に注ぐ内陸大河、そして東アジアの海につながるアムール川流域という、スラブ・ユーラシアの国際河川域を取り上げ、自然環境と社会変動ないし、国際関係との係わりを多面的に検討する講演を市民向けにおこないました。

ユーラシアの東端に位置する日本、なかでもロシアや中国と一衣帯水の位置にある北海道が果たすべき役割などについて、60名ほどの聴講者の皆さんから様々な質問や意見も提示され、熱い議論で終了時間を過ぎてしまうこともありました。講演題目と講演者は以下の通りです。[家田]

日 程		講 義 題 目	講 師
第1回	5月11日(金)	ドナウ中流域と環境汚染事故への対応	北海道大学スラブ研究センター 教 授 家 田 修
第2回	5月14日(月)	中央ユーラシアの人と自然の歴史：ユーラシア深奥部の眺め	総合地球環境学研究所 教 授 窪 田 順 平
第3回	5月18日(金)	ドナウ・デルタをめぐる国際法レジームのダイナミズム	北海道大学法学研究科 教 授 児 矢 野 マリ
第4回	5月21日(月)	中央アジア政治史と水	北海道大学スラブ研究センター 研究員 地 田 徹 朗
第5回	5月25日(金)	松花江の汚染と東アジア水域	鳥取環境大学 准教授 相 川 泰
第6回	5月28日(月)	アムール・オホーツク巨大魚付林と東アジア地域協力	北海道大学低温科学研究所 教 授 白 岩 孝 行
第7回	5月31日(木)	東アジアの環境リテラシー	日本大学 助 教 山 下 哲 平

◆ 2013年度特任教員(外国人)決定 ◆

2013年度における外国人特任教授の審査がおこなわれ、45人の応募者の中から、以下の6名の正候補者が、過日の協議委員会で承認されました。[松里]

ボグダノフ、コンスタンチン (Bogdanov, Konstantin)

所属・現職：ロシア科学アカデミーロシア文学研究所 [プーシキン館] 上級研究員

研究テーマ：ソヴィエト期およびポスト・ソヴィエト期の言語文化における人権の理解：キーコンセプトとキーエモーション

予定滞在期間：2013年11月1日～2014年3月31日(5ヵ月)

バーバンク、ジェーン (Burbank, Jane)

所属・現職：ニューヨーク大学歴史学部、およびロシア・スラブ学部教授

研究テーマ：国家の法の下での生活：カザン司法管区におけるロシアの主権、1890-1917

予定滞在期間：2013年6月1日～2013年10月31日(5ヵ月)

エルキノフ、アフタンディル (Erkinov, Aftandil)

所属・現職：タシケント国立東洋学大学東洋古典文献学部教授

研究テーマ：イスラーム「対」イスラーム：トルキスタン総督府におけるテュルク化のプロセス(1867-1917)

予定滞在期間：2013年11月1日～2014年3月31日(5ヵ月)

イスラモフ、バフティオル (Islamov, Bakhtior)

所属・現職：プレハーノフ記念ロシア経済大学タシケント分校経済理論学部教授

研究テーマ：中央アジア諸国の 20 年：達成と失敗

予定滞在期間：2013 年 11 月 1 日～2014 年 3 月 31 日 (5 ヶ月)

マナエフ、オレグ (Manaev, Oleg)

所属・現職：ペラルーシ国立大学哲学・社会科学部社会コミュニケーション学科教授

研究テーマ：ポスト・ソヴィエト期の権威主義の特殊性と、当該地域に与えた影響：ペラルーシのケース (ロシア・ウクライナとの比較)

予定滞在期間：2013 年 6 月 1 日～2013 年 10 月 31 日 (5 ヶ月)

ザイツェフ、イリヤ (Zaytsev, Ilya)

所属・現職：ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員

研究テーマ：ロシア国家と欧露・シベリアのムスリム (16-19 世紀)：帝国の無関心か正教の寛容さか

予定滞在期間：2013 年 6 月 1 日～2013 年 10 月 31 日 (5 ヶ月)

◆ **鈴川・中村基金奨励研究員決まる** ◆

今年は 12 名の応募があり、以下の 5 名の方が採用されました。[望月]

採用決定者・所属	テーマ	希望滞在期間	ホスト教員
岡本 佳子 東京大学大学院	世紀転換期ブダペシュトの歌劇場の機能を国民オペラ受容の観点から分析	2012 年 7 月 23 日～8 月 5 日	家田
神竹喜重子 一橋大学大学院	マーモントフ・オペラ劇場でのセルゲイ・ラフマニノフの人的交流	2012 年 7 月 20 日～8 月 9 日	望月
Gorshkov, Victor 京都大学大学院	銀行制度の発展とロシアの多国籍銀行の海外進出	2012 年 7 月 3～17 日	田畑
高田 映介 京都大学大学院	『谷間』を中心とするチェーホフ農村三部作と 19 世紀後半のロシア社会状況の関連	2012 年 9 月 2～17 日	望月
宮崎 淳史 東京外国語大学大学院	チェコのシュルレアリスムと他の作品との比較検討と芸術家本人のテキスト分析	2012 年 11 月 1～16 日	野町

◆ **ツァチェフスキ氏の滞在** ◆

国際交流基金の招へい海外研究員としてブルガリアの政治学者で、外交の事務経験者でもあるベネリン・ツァチェフスキ (Venelin Tsachevsky) 氏が 5 月末から半年の予定で滞在中です。氏はブルガリアの EU 加盟の際に在フィンランド大使として、当時懸案だったブルガリアの原発問題をめぐって、最も強硬派だったフィンランドとの交渉に当たりました。もともとは日本の対米政策にも関心を持って研究したこともありますが、今回の滞在中では東欧の原発政策について、日本との比較も含めて研究し、10 月末に報告をしていただく予定です。[家田]

◆ バトサイハン氏の滞在 ◆

国際交流基金の日本研究フェローとして、モンゴル科学アカデミー国際研究所ロシア研究部部長のオーホノイ、バトサイハン (Ookhnoi, Batsaikhan) 氏が8月3～31日(約1ヵ月)の予定で滞在中です。滞在中の研究テーマは「1910年代の日露協約とモンゴル」です。8月22日には、「1911年のモンゴル独立とボグド・ハーン：ロシア・ファクター」と題する報告をしていただきました。[ウルフ]

◆ 専任セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2012年6月4日：松里公孝 “Moving Peripheries Eastward: Russia’s Expansion and Reorganization of *Sosloviia* [Estates] in the Orenburg Governor-Generalship in the Mid-Nineteenth Century”

センター外コメンテータ：松村岳志 (大東文化大学)

討論者の村松岳志氏の表現に従えば、「ロシア史に関する松里公孝氏の最大の功績はロシア帝国のイメージを完全に新しいものに書き換えたこと」つまり、ロシア帝国イメージの「諸民族の牢獄」ないし「農奴主国家体制」から、「地域エリートの連合組織」へと転換したことです。今回の松里論文では帝国の軍事組織との関連で帝国の辺境をどう統治していくのかという問題に対して、地域エリートの視点を踏まえて、地域比較論が展開されました。さらに松里論文によればオレンブルクのコサック軍の役割は社会主義時代にまで広がる射程の長い問題領域です。また近代ロシアの地方自治であるゼムストヴォにもかかわる論点も提示されました。この論文は雑誌 *Kritika* に掲載される予定とのこと。ご関心の方は遠からずして色々な論点の詰まったこの論文を手にとることができることになります。

◆ 研究会活動 ◆

ニュース129号以降、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。ただし、今号で特に紹介したものは省略します。[大須賀]

- 5月16日 B. ラーニン (ロシア教育アカデミー) 「アレクサンドル・エヴラホフ：忘れられた天才 (ロシア語)」 (新学術セミナー)
- 5月18日 中山大将 (学振特別研究員) 「日本帝国崩壊後の樺太植民地社会の変容解体過程」 (ポードースタディーズ・セミナー)
- 5月22日 左近幸村 (学振特別研究員) 「書評：遅塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、2010)」 (GCOE-SRC 研究員セミナー／世界文学研究会)
- 5月25日 一緒に考えましょう講座「放射能を自分で測ろう」
- 5月26日 上村明 (東京外国語大) 「地図と統治：清朝期モンゴルにおける旗の地図をめぐる」 (北海道中央ユーラシア研究会)
- 6月9日 基盤研究 (B) 「北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割」 研究会 尾形芳秀 (樺太豊原会) 「樺太時代における多民族 (残留・亡命人) との共生」； 鈴木仁 (北海道文化財保護協会) 「樺太における図書館の歴史」 一緒に考えましょう講座「国際社会は日本をどう見ているのか」
- 6月15日 吉岡潤 (津田塾大) 「ポーランドの移ろう国境線と隣人たち：国境線を生む隣人たち／国境線が生む隣人たち」 (ポードースタディーズ・特別セミナー)

- 6月16日 清水由里子（中央大）「テュルクかウイグルか：20世紀前半期の知識人の言説に見る民族名称と歴史認識」；秋山徹（学振特別研究員・財団法人東洋文庫）「パートゥル考：ロシア帝政期クルグズ人首領層の権威をめぐる一考察」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 6月21日 橋本努（北大・経済）「北欧型新自由主義の到来」（ボーダースタディーズ・セミナー）
- 7月10日 V. ゴルシコフ（京都大・院）“Foreign Banking in Russia（日本語）”（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）
- 7月14日 Demographic Trends in Russia S. ザハロフ（京都大）“Second Demographic Transition: Russia’s Case in the Context of European and Japanese Experience”；S. リャザンツェフ（センター）“Migration and Migratory Policy of Russia in Modern Demographic Conditions: Problems and Optimization Ways”（センターセミナー）
基盤研究(B)「辺境と異境：非中心におけるロシア文化の比較研究」2012年度国際研究集会 T. ニーコノヴァ（ヴォロネジ大、ロシア）“Особенности литературного процесса русского зарубежья 1920-1930-х гг.”；O. ベールドニコヴァ（同）“Творчество И. Бунина в контексте литературы русского зарубежья 1920-1930-х годов”；望月恒子（北大・文）“«Россия» и «русское» в романе И. Бунина «Жизнь Арсеньева»”；B. ラーニン（ロシア教育アカデミー）“Эстетические и политические итоги литературы третьей волны”；岩本和久（稚内北星学園大）“Солженицын в Японии”
- 7月15日 塩原俊彦（高知大）「ガस्पロムからみたロシアの政治経済分析」；田畑伸一郎（センター）「環オホーツク海地域の環境と経済：北大低温研等との共同研究の成果」（SRC 共同研究報告会）
- 7月15-16日 近現代戦の表象比較研究「戦争のメモリー・スケープ」 中野徹（近畿大）「“英雄”の変相：連環画『鉄道遊撃隊』をめぐる」；高本康子（センター）「日本人と『大陸』世界：満鉄映画に見る『喇嘛教』表象」；向後恵里子（早稲田大）「肉弾：日露戦争における戦死の表象」；越野剛（センター）「ナポレオンのロシア遠征と戦う農民のイメージ」；田村容子（福井大）「たたかう女性像の系譜：近現代の中国演劇における戦闘少女と寡婦」；前田しほ（センター）「ソ連の戦争表象における視覚的女性像：共同体を統合する“母”の慈愛」；高山陽子（亜細亜大）「中国における監獄の観光化」；平山陽洋（センター）、今井昭夫（東京外国語大）「ベトナムにおける顕彰記念の空間的形象：戦没者墓地、戦跡、博物館、記念碑」
- 7月17日 N. ボタボヴァ（サハリン国立大、ロシア）「1917-1922年のロシア極東における福音バプテスト教会の動向：知られざる歴史（ロシア語）」（センターセミナー）
- 7月24日 宮崎悠（学振特別研究員）「素晴らしき新世界の遊撃：ポーランドにおける『政治評論』の動向2002-2012」；E. ボイル（北大・法・院）“Sovereign Migrations: Making Territory Japanese and the Nationalization of Empires”（GCOE-SRC 研究員セミナー）
- 7月26日 本田晃子（センター）「忘却の記憶：アレクサンドル・プロツキーとペーパー・アーキテクチャー運動」（北海道スラブ研究会総会）
- 7月27日 左近幸村（学振特別研究員）「南アフリカ出張報告：第16回世界経済史会議への参加」（昼食懇談会）
岡本佳子（東京大・院）「歌劇場におけるナショナル・オペラ制作の位置づけ：ハンガリー王立歌劇場を中心に」；神竹喜重子（一橋大・院）「19世紀末から20世紀初期のクラシック音楽における聴取文化の変化とセルゲイ・ラフマニノフの音楽の受容」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）

- 8月6日 佐藤隆広（神戸大）“Firm Dynamics and Productivity Growth in Indian Manufacturing: Evidence from Plant Level Panel Data（日本語）”（新学術セミナー）
- 8月10日 一緒に考えましょう講座 上野一詔（福島市）、佐藤健太（負けねど飯館常任理事、飯館村）、吉田しのぶ（須賀川市）「福島避難者の声を聞こう」
- 8月20日 J. ラウンド（センター）；“Coping with Uncertainty: Everyday Life in Moscow and Kazan”；I. クズネツォヴァ（カザン連邦大、ロシア）“The Formation of Social Capital amongst Muslims in Kazan: The Role of Charities”（センターセミナー）
- 8月22日 O. バトサイハン（モンゴル科学アカデミー国際研究所）「1911年のモンゴル独立とボグド・ハーン：ロシア・ファクター（ロシア語）」（新学術セミナー）

スラブ・ユーラシアの今を読む

タタルスタン・ムスリム宗務局指導者殺傷事件：概要と背景

ロシアの中でも平和で先進的なムスリム地域の代表と見られているタタルスタンの首都カザンで、2012年7月19日、モスクやイスラーム教育機関などを統轄する宗務局の指導者2人が相次いで襲撃・殺傷された。いったい何が起きたのか。背景にあるのは過激派の浸透なのか、巡礼利権なのか。事件当時カザンに滞在していた文化人類学者の桜間瑛と、タタル近現代史・イスラーム研究の専門家である長縄宣博が解説する。

カザンの凶弾

桜間瑛（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）



カザンカ川のほとりから望むカザン・クレムリン

で、直撃を避けることができた。即座に車を離れたファイゾフは、飛び散った車の破片で怪我をするにとどまり、一命は取り留めた。

白昼の街中で起きた事件は大きな衝撃を呼び、カザン市全体に緊急警戒体制が敷かれ、警察などによる調査が行われた。連邦中央や、事件の舞台となったタタルスタン共和国のマスコミは即座にこの事件についての報道を行い、タタルスタン大統領ルスタム・ミンニハノフは、犯人に関連する情報などについて懸賞金をかけることを表明した。また、ミンニハノフはさっ

2012年7月19日午前10時、ラマダン（断食月）の開始を翌日に控えたカザンで銃声が鳴り響き、タタルスタン・ムスリム宗務局の有力な聖職者の一人、ワリウッラー・ヤクポフが暗殺された。さらにそのおよそ30分後、宗務局ムフティーのイルドゥス・ファイゾフがラジオの出演を終えての帰宅途中、自らが運転していた車が爆発した。折しもヤクポフ襲撃について電話するために車を停めており、爆弾の仕掛けられた助手席ではなく、運転席に座っていたこと

そく入院中のファイゾフを訪れるとともに、特にムスリムにとって重要なラマダンを目前にして行われた凶行に対し、強く非難するコメントを発した。連邦大統領ウラジーミル・プーチンもこの事件を受けて、現在のロシアの情勢が決して安定していないことを示していると懸念を表明し、沿ヴォルガ連邦管区大統領全権代表のミハイル・バビチはこの事件をテロ事件として、解決に全力を注ぐと語った。

翌日、ヤクポフが長くイマームを務めたカザン市内のアパナエフ・モスクで、厳戒態勢の中行われた彼の葬儀には、宗教関係者・共和国政府関係者をはじめ、多くの人が集まる姿がテレビなどで報じられた。マイクを向けられた参列者は一様に、彼が「伝統的」イスラームの庇護者であり、ロシア正教をはじめとする他の宗教との友好も推進しつつ、穏健なイスラームのあり方を模索していたと語った。この事件についてコメントしたカザン府主教アナスターシーも、両宗教の友好に貢献した人物として、ヤクポフの悲劇を悼んだ。

すでにこの葬儀に先立つ20日早朝には、かつてタタルスタンからのハッジ派遣を一手に引き受けていた「イデル・ハッジ」の代表取締役ルステム・ガタウリリン、独立イスラーム組織「ワクフ」代表ムラト・ガレエフほか2人が身柄を確保された。さらに夕方には、ウズベキスタン出身の青年が、ヤクポフ殺害の実行犯の疑いでやはり当局に拘束された。

ファイゾフは、1963年にタタル自治共和国テチューシ郡の村で生まれ、カザンの演劇専門学校を卒業した後、1998年までタタル語劇場で役者として働いた。その後、1998年から2001年にかけてカザンのマドラサ（イスラーム学院）で学び、さらにヨルダン、カタールに留学して研鑽を積んだ。2002年に帰国すると、カザンのブルガール・モスクのイマームとなり、同時にタタルスタン・ムスリム宗務局のプロパガンダ部の部長も務めた。2010年からは副ムフティーに就任し、グスマン・イスハコフが2011年の4月に職を辞した後、その後任に就いた。そして、ムフティー就任後は、前任者の在職中に勢力を伸ばしたとされる、ムハンマド時代のイスラームへの回帰を主張する急進派勢力に対抗する姿勢を鮮明にしていた。

ヤクポフは、1963年にバシキール自治共和国のウファ郡で生まれ、カザン化学技術大学を卒業した後、カザン大学歴史学部の通信科で歴史学も学んだ。その後、1990年代にはマドラサを卒業して、タタルのイスラーム復興の中心人物の一人となった。1992年にカザンのアパナエフ・モスクのイマームとなると、荒廃したモスクの復興に尽力し、1993年からはカザンのマドラサ「ムハンマディーヤ」の校長も務めた。さらに出版局「イマーン」の編集長として、数多くのイスラーム関係書籍の出版にもたずさわり、自らも多くの著作を残した。1995年以降はタタルスタン・ムスリム宗務局でも要職を占めるようになり、1998年からは副ムフティーの地位にあった。2005年には歴史学の学位を取得するなど、豊富な学識を誇り、マスコミ上にも頻繁に登場して「伝統的」イスラームを擁護する言論を展開していた。ムフティー交代後も副ムフティー職を維持したが、過激派対策を名目に各地のイマームの交代を進めるファイゾフの姿勢からは距離を置いていた。その後、副ムフティー職を退いて、共和国内のムスリム教育を管轄する役に就き、教育プログラムの標準化などの改革に取り組んでいた。

このファイゾフ体制下で行われてきた改革の一つが、ハッジ派遣事業改革であった。イスハコフ体制下では、タタルスタンに割り当てられたハッジ派遣枠について、その分配がすべて「イデル・ハッジ」の担当となることで、同社は大きな利益を得ていた。しかし、ファイゾフはその分配を宗務局管理下においたことで、同社と対立していたと伝えられている。ガタウリリンの逮捕は、こうした対立を背景にしているが、本人および「イデル・ハッジ」広報は、事件との関連を否定している。またそれと並んで、過激派対策を進めるファイゾフ体制を快く思わない、「ワッハーブ主義者」や「サラフィー主義者」とも呼ばれる急進派勢力が、両人の殺害を狙ったというも有力な説として、各種マスコミで紹介されている。

早期に複数の容疑者が拘束され、ガタウリリンなどは裁判所での審議の未逮捕、9月まで



カザン・クレムリン内のクル・シャリーフ・モスク

の勾留が決定した。全国レベルのマスコミの報道は、その後沈静化しつつあるが、タタルスタン共和国発のテレビや新聞は、連日大きな見出しでこの事件の経緯を追っている。逮捕されたガタウリンを含め各容疑者は容疑を否認している。現在も調査は続いていて、カザンの新聞紙上では、7月24日現在で100人近い容疑者が身柄を確保されていると伝えられている。

さらに週明けには、カザン・クレムリン内にあるクル・シャリーフ・モスクのイマームで、ファイゾフの主要な敵対者とみなされていたラミール・ユヌソフが、兼任していたカザン・クレムリン公園副園長を辞して、ロンドンに向かったという報道がBBC経由のニュースとして、各マスコミで一斉に流れた。語学研修が目的とされており、司法当局も当面は容疑者のリストには入っていないとして静観する姿勢を見せているが、この時期の突然の出国は、彼がこの事件に何らかの関係をしているのではないかという憶測を呼んでいる。

ユヌソフはサウジアラビアに留学経験があり、共和国内における急進的な勢力の中心人物とみなされていた。また今年の春には、ファイゾフがユヌソフを解任して、自らクル・シャリーフ・モスクのイマームになることを画策したことで、両人の溝が深まったとも言われており、こうした聖職者間の対立も事件に反映しているのではないかと考えられている。

7月25日にファイゾフは無事に退院し、早速翌日には声明を発表してヤクポフへの弔いの言葉を述べるとともに、犯人にはアッラーの意志によって、然るべき罰が下るだろうと語った。しかし、公務に完全に復帰するには至らず、臨時代理に第1副ムフティーのアブドゥッラ・アディガモフが任命された。

この事件を受けて、イスラーム問題を専門としている政治学者のライス・スレイマノフは新聞紙上でコメントを発売し、タタルスタンが第2のダゲスタンとなる予兆ではないかという警鐘も鳴らしている。かつてのダゲスタンにおいても、ムッラーの暗殺事件などが頻発し、共和国全体の不安定化につながったといい、タタルスタンもそのシナリオをなぞるのではないかというのである。ここ数年、北カフカスからの流入者を主な媒介として、タタルスタン領内で急進派の勢力が伸長しているという報道が、特にモスクワの新聞などで度々なされていた。今回の事件についても、以前から両人に危険が及ぶのではないかという警告があり、実際に脅迫もあったのに対し、十分な警戒がなされていなかったのではという批判もなされている。今後は急進派対策として、宗教教育現場も含め、当局による警戒・管理を強めることも致し方ないのではないかという意見が、イスラーム関係者自身の口からも出ていることがテレビではくり返し映し出されていた。一部タブロイド紙などでは、ロシア連邦保安庁が、北カフカスに集中している人々の注意をタタルスタンに向けさせるためにこの事件を起こした、という謀略説も紹介しているが、十分な根拠はない。

折しも筆者は現地調査のため、カザンに滞在中であったが⁽¹⁾、当日は朝から外出しており、

1 今回の滞在は、現在筆者が執筆中の博士論文のための資料補充を目的としており、2011年度採用松下幸之助記念財団研究助成に基づいている。

この事件について知ったのは翌日になってからであった。事件現場から離れていることもあってか、特別警戒態勢とは言いつつ、カザン大学付近の中心部は平穏であり、警察も目立って多いという印象はなかった。

事件翌日に、大統領府とクル・シャリーフ・モスクのあるカザン・クレムリンに寄った際も、特に強い警戒は敷かれていなかった。一応、警察によるチェックは行われており、筆者はリュックサックが重そうという理由で足止めされたが、中身はノート・パソコンだといった実物を見せると、それ以上の特別な詮索もなく、パスポートを調べられることもないまま中に入ることができた。筆者は入らなかったものの、モスクの中に入るにはもう少し念入りな検査を行なっている様子も見られた。しかし、これも建物に近づく程度であればなんの注意もなく、見回っている警察官も2、3人程度でやはりそこまで警戒をしているという印象ではなかった。むしろ、クレムリンの中は、結婚式の記念撮影のために、若者集団が大勢訪れているのが見られ、通常の夏に見られるのどかな風景が印象的であった。また、犠牲者を出した宗務局の近くも歩いてみたが、2、3台退屈そうな警察官が乗り込んだ車を見たほかは、特別な警戒の様子もなく、普段通りの光景が広がっていた。

とはいえ、これまで多文化・多宗教の共存を誇りとしてきたカザンに突如起こった事件は、人々に大きな衝撃を与えるものであったことは確かであり、筆者が現地の人と話す中でもまず話題に上った。筆者の知人のロシア正教の司祭は、ヤクポフについて「いい人物であった」と評価しており、彼の標榜していた「伝統的」イスラームに対して理解を示している。一方、1990年代以降、サウジアラビアやイランから急進派思想が流入しており、それを許した前共和国大統領ミンチメル・シャイミエフのムスリム＝タタール中心主義を非難する声も聞かれる。もっともシャイミエフ自身も、週明けになって会見を開き、今回の事件を強く非難しつつ「伝統的」イスラームを誇示することの重要性を強調している。

タタールのイスラームに対する態度は、基本的に厳格なものではないと言われており、酒を飲んだり、豚を口にしたりするタタールも珍しくなく、礼拝などを真面目に行う人の数は多くはない。しかし、断続的にカザンを訪問している筆者の印象として、スカーフをかぶった女性の数などは、だんだんと増加している印象がある。主に若い女性が着用しており、それに対して親世代が戸惑いを見せたり、職場での軋轢を生んだりしている例もある。一方、このような女性などを対象に、イスラームの規範に配慮したサービス（ムスリム女性専用プール、夜のモスクへのムスリムの運転手によるタクシー・サービス）も現れており、新たなビジネス・チャンスを生み出してもいる。

そのタタールにとってのイスラームの在り方について、前共和国大統領政治顧問で、歴史学研究所の所長であるラファエル・ハキーモフは、しばしば「ユーロ・イスラーム」という言葉を用い、近代的な価値規範に適合したムスリムの在り方を提唱している。一方、ヤクポフを始めとする宗務局関係者は「ユーロ・イスラーム」のコンセプトには反対しつつ、ハナフィー学派の伝統に則り、他宗教との調和を強調した形での「伝統的」イスラームを標榜してきた。これらに対し、先にも指摘した通り、サウジアラビアなどに範を取った急進的な思想を支持する人びとも現れており、潜在的な脅威となってきた。

カザンは、来年にユニバーシアードの開催を控え、それを梃子に本格的な観光都市への転換を図り、現在町中で工事が行われている。経済的にも連邦内では比較的良好な状態を維持しており、急進的な思想が一挙に人々の間に広まるとは筆者には想像しがたい。しかし、イスラームがタタールの伝統的な文化の重要な要素であるという意識は共有されており、その「正しい」あり方については、様々な対立を生み、議論を呼んでいる。また、ムスリム関連のビジネスが発展しつつあることで、経済的な利害も関連するようになり、より複雑な対立の構図も示しつつある。今回の事件は、こうした亀裂を白日のもとに晒すとともに、これまで

多民族・多宗教の共存を謳ってきたタタルスタン共和国の状況も不安定化の要素を含んでいることを明らかにした。

7月19日のカザンにおけるテロの背景に関する 一考察

長縄宣博（センター）

こんにちのロシアにおいて、ロシアが国内外のイスラーム世界と共存し、友好関係を結んでいるのだという言説は、内政上も外交上も極めて重要な意味を持っている。カザンにはそうした言説を体現する役割が期待されており、タタール人自身それを誇りにしている。実際、タタルスタン前大統領ミンチメル・シャイミエフは、ロシア大統領のイスラーム諸国訪問にしばしば同行したものだし、近年のカザンでは、毎年のようにイスラーム諸国の代表団を招いた国際会議が開かれている。カザンが、モスクワ、サンクトペテルブルグに次ぐ第三の首都と呼ばれるようになってきているのは偶然ではなく、ちょうど一年後には、ユニバーシアードを招致することになっている。そしてその広報の仕方も、カザンがキリスト教文明とイスラーム文明が邂逅した土地であるというイメージを前面に押し出すものとなっている。そうした文脈で、タタルスタン共和国のイスラーム最高指導部を狙い撃ちにしたテロが、カザンの中心部に近い場所で起こったことは、ロシアにとって深刻な事態である。

折しもカザンでは7月20日に反テロ演習が計画されていたが、テロの前日に中止が決まっていた。そして、このテロによって演習は無期限延期になった。こうしたタイミングは、タタルスタンの治安当局自身がテロを仕組んで、北コーカサスに流れる反テロ対策の資金をタタルスタンに流そうとしたのだという憶測も生んだ。

テロの翌日に拘束された容疑者のリストからは、捜査当局の基本的な見立てを窺い知ることができる。一人目は、旅行会社イデル・ハッジの代表取締役ルステム・ガタウリン。この会社は、タタルスタン宗務局と独占的な契約を交わして、タタルスタンだけでなく、ロシアでタタール人の集住する約30地域でメッカ巡礼（ハッジ）事業を取り仕切っていた。二人目は、ムラト・ガレエフという慈善事業家で、ムスリム・カフェの経営をめぐって宗務局と対立があったといわれる。また、今回のテロで負傷したムフティー、イルドゥス・ファイゾフに不満を持つ人々を結集する組織を画策していたとされる。三人目は、ヴィソコゴルスキー地区の住民アイラト・シャキロフ。彼は、地元だけでなくカザン市内のモスクでも原理主義的な説法を行い、宗教間の敵対を煽っていたので、以前から当局も監視していた。四人目はライシェフ地区シンゲリ村のモスクの指導者アザト・ガイヌッディノフ。シンゲリ村は、ウファの中央宗務局のムフティー、タルガト・タジュッディンの父親の故郷であり、そのモスクもタジュッディンの肝煎りで建立されたという。ただ、中央宗務局とタタルスタン宗務局との対立が激しかったのは2000年代初めまでで、近年では沈静化していたので、犯行動機につながる情報はない⁽¹⁾。

これらの容疑者の名前からは、現代ロシアのムスリム社会の問題を集約するような二つの問題が、今回の事件の有力な背景として浮かび上がっている。イスラーム原理主義との闘いとメッカ巡礼事業である。以下では、ソ連崩壊後の文脈も踏まえて、順に考察を加えていきたい。

1 <http://www.intertat.ru/obschestvo/item/6333-u-sledstviya-dve-versii-vera-i-dengi.html>

イスラームがロシア国家の統合に寄与しているという平和共存のイメージと表裏一体となっているのが、ロシア語で一般にワッハービズムと称される原理主義に対する徹底した弾圧である。ワッハービズムという語自体が示すように、これはもともとサウジアラビアで公式に信奉されているワッハーブ派からとられた名称である。もっともこれは他称であって、ロシアでも信奉者自身はサラフィー主義という言葉を好む。アラビア語でサラフ (salaf) とは祖先を意味するので、サラフィー主義とは、原初イスラームの先人たちの教えに回帰することを目指す運動ということになる。

タタルスタンはじめロシアにワッハービズムが浸透し始めたのは、1990年代後半のことである。1990年代初頭、旧ソ連のムスリム地域には、サウジアラビアなどから慈善団体が数多く入り込み、モスクや学校の建設を支援し、それらに配置する宗教指導者を養成すべく、多くの若者をサウジアラビアなどに留学させた。ところが90年代後半、留学を終えて故郷に戻ってきた人々の中から、地元で実践されているイスラームのあり方が自分の勉強した「純粋なイスラーム」から逸脱していることを問題視する者が現れるようになった。そしてこれが、イスラーム復興に伴う宗教指導者の需要増大と重なることで、土地の宗教実践を維持・普及させようとする伝統主義者と原理主義者の敵対を増幅することになったのである。

プーチン時代（最初に首相を務めた時期も含めた1999-2008年）のロシアでは、国際テロリズムとの戦いの名目で、ムスリム社会に対する監視が強まった一方、ムスリム・エリートとの協力が著しく進展した。それは、ワッハービズムに対抗する形で「伝統的なイスラーム」をロシアの各地域で再興する動きを後押しした。タタルスタンにおける伝統的イスラームというのは、イスラーム法学の中のハナフィー派に基づいた儀礼を執り行うことができ、帝政期に活躍したタタール人のイスラーム学者の衣鉢を継ぐことを意味する。こうしたイスラーム知識人を養成すべく、カザンには1998年からすでにロシア・イスラーム大学と言われる高等教育機関が機能している。今回殺害されたワリウッラー・ヤクポフ（1963年生）は、こうした伝統的イスラームの復興の一翼を担ってきた傑出した人物で、1997年から十年以上、副ムフティー職を務めた。とりわけ彼の率いた出版社イマーン（信仰）は、帝政期、ソ連期、現代のタタール人の学者や知識人の著作を非常に精力的に出版しその普及に努めた。よってヤクポフは、国内外の研究者の間でも広く知られている。

他方でロシア政府は、民間経路でムスリム社会に流入するオイルマネーの影響には警戒しつつも、サウジアラビアとの関係強化に熱心に取り組んできた。とりわけ、多民族・多宗教の共存がロシアにとって重要な外交資源となった2003年のイラク戦争以降、両国の関係は進展した。当時皇太子だったアブドゥッラー現国王は、2003年9月に訪露しており、政治・経済・文化面での「戦略的パートナーシップ」の礎を据えた。2005年6月末にロシアはイスラーム諸国会議機構のオブザーバーになったが、その背後にもサウジ側の一貫した支持があった。こうして2007年2月11日には、プーチンがロシアの国家元首として初めてリヤドを訪問する運びとなった。そしてそこにはシャイミエフも同行していた。こうしたロシアとサウジアラビアの良好な関係は、後述するロシアからのメッカ巡礼者増大の重要な背景を成している。

北コーカサスで宗務局の幹部を狙ったテロが頻発していることと比べれば、タタルスタンでのワッハービズムとの闘争は相対的に穏やかに推移してきた。1999年8月にチェチェン・テロリストがダゲスタンに侵入して第二次チェチェン戦争が始まった後、タタルスタンでも、ワッハービズムへの警戒が高まった。9月にモスクワとヴォルゴドンスクで集合住宅が爆破される事件があったが、その首謀者とされたのがウズベキスタン出身で、タタルスタンのナベレジヌィエ・チェルヌィのマドラサ（イスラーム教育機関）、ヨルドゥズで学ぶ学生だった。12月には、このマドラサの複数の学生がタタルスタンとキーロフ州の境にあるガス・パイプラインを爆破した。ヨルドゥズ・マドラサは、過激派の戦闘員を養成するサウジの慈善団体

と密接な協力関係にあったといわれている。近年で最も規模が大きく、こんにちまで隠然と影響を残しているのが、2010年11月末にヌラト地区ノヴォエ・アルメチエヴォ村で起こった、原理主義を掲げるチストポリ出身の武装グループと治安部隊との銃撃戦である。これが原因で翌1月13日に、1998年からムフティーだったグスマン・イスハコフは辞任を余儀なくされた⁽²⁾。

このように、これまでタタルスタンでワッハービズムと治安当局との衝突は地理的にもカザンから遠い場所で起こってきた。しかし今回は、ワッハービズムの関与が疑われる暴力がカザンの中心部にまで到達した点が衝撃的なのである。

今回の事件の有力な背景には、ムフティー、イルドゥス・ファイゾフによる強引な宗教指導者の人事があったと言われている。昨年4月にイスハコフに代わって、ファイゾフがムフティーに就任したことは、ワッハービズムとの闘いの新しい段階の始まりといえる。ファイゾフによれば、タタルスタンで原理主義者が跳梁しているのは、先代のイスハコフが黙認してきたからに他ならないのだった。

ワリウッラー・ヤクポフもイスハコフとは折り合いが悪く、2008年には一時的に副ムフティー職を解かれているが、すぐに宗務局と官庁との関係を取り仕切る副ムフティーに戻った。新しい指導部の中でヤクポフは、教育・学術部長というやや低い地位に配属されたとはいえ、マドラサの教育改革に精力的に取り組んでいた。他方で、ファイゾフの手荒な人事とは距離を置こうとしていたようだ⁽³⁾。筆者は今年2月にヤクポフにインタビューする機会を得たが、ワッハービズムとの闘いの最前線にいる当事者のわりには、どこか斜に構えた第三者的な口調が印象深かった。

ファイゾフは、共和国の全イマームの資格審査を実施し、サラフィー主義の放棄を拒否した人々を更迭し、自分の息のかかったイマームを任命し始めた。昨年12月には、アルメチエフスク市金曜モスクのイマーム、ナージル・アウハデエフが解任された。治安当局の情報によれば、彼は自身の教育活動のために、サウジアラビアの宗教財産(ワクフ)省から報酬を得ていたとされる。12月末には、新しいイマームの着任を阻むべくモスクの入り口を閉ざすなど、住民が激しい抵抗を示した。

今年4月2日には、カザン・クレムリンの中にある壮大なクル・シャリーフ・モスクで2005年の開基以来イマーム・ハティーブ(礼拝を主導し、説教を行う者)を務めてきたラミール・ユヌソフが辞職に追い込まれた。ユヌソフは、5年ほどサウジアラビアで学んだことがあり、モスク開基の際に「サラフィー主義者」のやり方で礼拝をおこなったと言われる。イスハコフがムフティーを辞任した後は、彼が後継者になるとサラフィー主義者の間では目されていた。今回の措置についてファイゾフは、ユヌソフはそれまでカザン・クレムリン公園の職員にすぎなかったわけで、今後、クル・シャリーフの宗教活動を宗務局の管轄に移すにあたり、当然ムフティー自身がその指導者になるべきだと説明した。この事件も、日常的にこのモスクで礼拝する人々の間で大きな反発を呼び起こした。ファイゾフは、ユヌソフを自身の補佐としてクル・シャリーフに残すことで事態を収拾した⁽⁴⁾。

今回のテロの背景として重視されている第二の問題は、過去十年におけるメッカ巡礼の隆盛とその商業化である⁽⁵⁾。2000年には3,000人ほどだったロシアからの巡礼者も、近年では

2 <http://www.ru.journal-neo.com/node/4179>

3 <http://www.business-gazeta.ru/text/63247>

4 <http://intertat.ru/obschestvo/item/3748-imamyi-branyatsya-tolko-teshatsya.html>

5 この問題について筆者は、去る7月5日のスラブ研究センターの国際シンポジウムにペーパーを提出したので、関心のある方には引用不可の条件でペーパーを送ることもできる。

実に2万人を超え、その市場規模は6,000万ドルと推定されている。巡礼者の3分の2以上はダゲスタンからである。よって、ダゲスタンでは早くからハッジの巨額の利権をめぐる政治が過熱し、1998年8月の共和国のムフティー爆殺の背後にもこの問題があったとされている⁶⁾。

ここで簡潔に、現代ロシアのハッジ事業の仕組みを概観しておこう。2002年以来、ロシア政府の中にはハッジ評議会という常設機関があり、省庁間の調整を担っている。議長にはダゲスタンの出身者が就き、初代は下院議員アフメド・ピラロフ、2010年4月からは連邦会議(上院)副議長イリヤス・ウマハノフが務めている。この評議会は毎年、サウジアラビアのハッジ省と交渉して、ロシアの巡礼者枠を確定している(ちなみに昨年は22,500人)。そしてこの枠は、評議会に参加している5つの最有力宗務局の間で分配される。その際、宗務局の推薦に基づいて、評議会はハッジのツアーを組織する特定の旅行会社にも認可を与える。つまり、メッカ巡礼市場は、有力な宗務局が特定の旅行会社と独占的な契約を結んで、巡礼者枠を委任する寡占状態にあるのだ。今回のテロで名前の挙がったイデル・ハッジとは、これまでタタルスタン宗務局が資本の20%を拠出し、そのハッジ事業のすべてを委ねてきた旅行会社だったわけである。



イデル・ハッジの広告「君のメッカへの道」

今年4月23日、ファイゾフは先代イスハコフが作ったこの会社に代えて、宗務局直轄の新たな組織を設け、その下でハッジのサービスを提供できる複数の旅行会社と協力すると発表した⁷⁾。「タタル・ビジネス界 (Татарский деловой мир)」と名付けられた新しい組織は、通称「宗務局ハッジ (ДУМ РТ хадж)」と呼ばれ、その支配人には、ルスラン・ナフィスツリンが就いた。以降イデル・ハッジには、ハッジ委員会からタタルスタンに配分される巡礼者枠は委任されず、ただ巡礼希望者の受付のみを担うことになり、ツアーの販売など巡礼事業の資金の流れは完全に宗務局に押さえられることになった。宗務局は今回の措置について、これまでイデル・ハッジが不当に吊り上げてきたツアーの価格を下げ、ハッジを広範に促進することを目的とするものと説明している。新しい組織は、昨年12万ルーブルだったツアーを一人あたり最低10万ルーブル弱に抑えられるはずだった。

ファイゾフは、ムフティー就任当初からタタルスタンのハッジ事業の改革を掲げていた。昨年は、イデル・ハッジ以外に、二つの会社を参入させ、サービスと価格で三つ巴の競争をさせようとした。しかし、イデル・ハッジが独占的に組織した時よりも、個々の会社でロジにかかると費用が大きくなったため、それが価格に跳ね返り、結局、値下がりにはしなかったという⁸⁾。また、三社ではやはり談合の可能性も排除できない。しかも、巡礼者の利便をはか

6 Kimitaka Matsuzato and Magomed-Rasul Ibragimov, "Islamic Politics at the Sub-regional Level in Dagestan: Tariqa Brotherhoods, Ethnicities, Localism and the Spiritual Board," *Europe-Asia Studies* 57, no. 5 (2005), 762.

7 <http://www.tatcenter.ru/article/114011/>

8 イデル・ハッジ総支配人アヤズ・ミンガレエフとのインタビュー。2012年2月7日カザンにて。

ろうとする表向きの姿勢とは裏腹に、新しいムフティーにも闇の側面がある。筆者が今年2月にカザンでメッカ巡礼について調査を行った際、宗務局に近い信頼できる筋から、ファイゾフは、昨年タタルスタンに配分された巡礼者枠のうち500ほどを、一枠あたり100-200ドルで売り、収益を自分のポケットに収めたという話を聞いた。真偽のほどはともかく、メッカ巡礼の利権が歴代ムフティーにとっていかに垂涎的となっているかは窺えよう。

テロの起きた1週間前には、イデル・ハッジを支持するグループが400人の署名の入った書簡をムフティーに提出していた⁹⁾。そこでは、宗務局ハッジの約束にもかかわらず、価格が12万2000ルーブルとなっていることや、10年の経験で信頼性の高いイデル・ハッジに対して、一度もハッジに行ったことのない者が指揮する宗務局ハッジなど安心できないことが訴えられていた。書簡によれば、イデル・ハッジにはすでに1,000以上の申込みがあるにもかかわらず、宗務局ハッジには100程度しか集まっていないという。そしてこのグループは、事態の解決にはハッジ委員会に訴えることも辞さないという構えを見せている。

イデル・ハッジに申し込んでいる人々は、すでに契約を結び、料金を支払っているようだ。この状況は、巡礼ヴィザを取得する際に問題になりかねない。実は昨年、在モスクワ・サウジ大使館は、ハッジ委員会からも宗務局からも認可のないモスクワとウファの旅行会社が手配した450人について、ヴィザを発給しなかった。こうしてこの450人はハッジに行けず、旅行費用を取り返すことも困難な状況に陥った¹⁰⁾。イデル・ハッジがタタルスタン宗務局と契約を結べない現状ではこうした状況が繰り返されかねず、ムフティーに対するさらなる反発を生むことになるだろう。

これに対して宗務局ハッジは自分たちの任務について、巡礼者がサウジアラビアでタタルスタンに伝統的ではないイスラームの思潮に染まることを防ぐことに主眼があるのだと説明し、イデル・ハッジではその保証はないと反論している。こうしたハッジの利権と関わる問題も、伝統主義者とワッハービズムの対置で説明されている点は注目しておいてよい。筆者は2月にカザンだけでなく、ダゲスタンのマハチカラとデルベントでも調査を行ったが、巡礼を通じてワッハービズムがロシア国内に持ち込まれかねないという言説は、カザンのほうが極端に強いと感じられた。

報道の中には、北コーカサスからの移民の増大がタタルスタンにテロの連鎖を持ち込みかねないという論調も見られるが、筆者は基本的にはまずタタルスタン宗務局の周辺でテロの原因を究明すべきだと考えている。とはいえ、ハッジ・ビジネスがタタルスタンととりわけダゲスタンを結び付けていることは否定できない。近年タタルスタンは2,000人の巡礼者枠を持っているが、実はタタルスタンからの巡礼者だけでは枠の半分ほどを満たすにすぎないという。そこでイデル・ハッジは、残りの枠をダゲスタンの枠から漏れた人々に売ることによって多額の収益を上げていたのである。昨年ダゲスタンは9,000人の枠だったにもかかわらず、14,500人もダゲスタン出身者がメッカに赴いたのは、彼らが共和国の外で枠を買っているからに他ならない。2月に著者がインタビューした際、ワリウッラー・ヤクポフは、巡礼者枠の配分をめぐる競争は熾烈さを極めていたので、タタール人とダゲスタン人の民族衝突も起こりかねないと語っていた。そしてそれを防ぐためにも、メッカ巡礼事業にロシア政府がもっと本格的に介入すべきだというのがヤクポフの立場だった。

現在までのところ、タタルスタン宗務局が握るメッカ巡礼事業などの巨額の利権をめぐる対立と、現代ロシアのムスリム社会に走るワッハービズムと伝統主義者の亀裂がテロの有力な背景と見られている。今後の展開として懸念されるのは、一般的な後者の説明が前面に押

9 <http://intertat.ru/obschestvo/item/6177-u-kazhdogo-muftiya-svoya-doroga-v-hadzh.html>

10 <http://www.business-gazeta.ru/text/48643/>

し出されることで、前者も含めた他の説明可能性が糊塗されてしまうことである。事態が深刻なのは、ワッハービズムと伝統的イスラームを対置する言説を駆使している人々と前者を弾圧する人々が重なっていることである。一方でこの二項対立は、ムスリム社会をロシア国家につなぎとめ、安定化を図る上で有効に機能している。他方で、ムスリム社会内部のあらゆる利害対立や政治がこの二項対立に収斂させられると、ワッハービズムを信奉しているとレッテルを貼られた人々が治安当局に拘束される蓋然性が高まってしまうのである。最近、テロに関わったとされる容疑者の範囲が急速に拡大しているのは、その表れのように思われてならない。(2012年7月31日現在)

学 界 短 信

◆ 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念大会 ◆

2000年4月に発足した北海道中央ユーラシア研究会が第100回を迎えるにあたり、7月14日に記念大会をスラブ研究センター大会議室で開催しました。研究会の発展に貢献して下さった方々、関東・関西からのゲストを含め40人近くが集まり、中央ユーラシア研究の将来を熱く語り合いました。この研究会は、今回の大会を含め、例会・大会・昼食懇談会・特別講演会が104回（その他、かつてはテュルク諸語講読会を不定期に開催）、報告123本、報告者70人を数えており、今後とも、日本の中央ユーラシア研究の拠点、特に若手の発表をじっくり議論する場としての機能を果たしていきたいと考えています。プログラムは以下の通りでした。[宇山]

<第1部>

報告1：川口琢司（藤女子大学）「ジョチ・ウルス史研究の現状と課題」

報告2：森本一夫（東京大学大学院情報学環・東洋文化研究所）「回民が用いた亜文・波斯文典拠：17・18世紀交替期河南省の碑文の検討から」

報告3：立花優（北海道大学大学院文学研究科博士課程）「中央ユーラシア政治研究の中のコーカサス」

報告4：須田将（北海道大学大学院文学研究科博士課程）「スターリンの大テロとウズベキスタン共産党」



森本氏の報告

<第2部>

報告：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター）「北海道中央ユーラシア研究会の歩みとこれからの中央ユーラシア研究」

総合討論

コメント：小松久男（東京外国語大学）、風戸真理（国立民族学博物館）、地田徹朗（北海道大学スラブ研究センター）

◆ 学会カレンダー ◆

2012年9月6-8日 第4回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於コルカタ、インド

10月6-7日 2012年度日本ロシア文学会全国大会、ロシア・東欧学会研究大会、ロシア史研究会大会、JSSEES大会 於京都

10月19-21日 日本国際政治学会研究大会 於名古屋

11月4日 内陸アジア史学会大会 於北海道大学

11月13-16日 BRIT XII大会 in 福岡・釜山

<http://www.borderstudies.jp/brit2012/top.html>

11月15-18日 ASEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於ニューオーリンズ

<http://aseees.org/convention.html>

2013年1月26日 新学術領域研究総括シンポジウム 於早稲田大学国際会議場

2015年8月3-8日 ICCEES 第9回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ (裏表紙参照) にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ The History of Modern Russian and Ukrainian Art, 1907-1930. Pt. 1 の購入 ◆

今年の初め、センター図書室は、IDCが販売する上記のマイクロフィッシュのセットを購入したことをお知らせします。このセットは、主に当時のロシアもしくはソ連で出版された、このテーマに関する65タイトルの単行書と、41タイトルの逐次刊行物を、1794枚のマイクロフィッシュに収めたものです。

内容を見ると、単行書では「ダイヤのジャック」芸術家協会『芸術論集』第1冊(1913年)、カジミル・マレーヴィチ(1878-1935)のものが『キュビズムからスプレマチズムへ』(1916年)ほか2点、ニコライ・プニンの『第3インターナショナル記念塔:B.タトリンの構想』(1920年)、『タトリン:キュビズムに抗して』(1921年)、ウラジミル・マトヴェイ(1877-1914)の、『黒人芸術』(1919年)など多数の稀覯書が収録されています。演劇、建築など、他分野の資料もなくはありませんが、ほとんどが美術関係のものです。

逐次刊行物では、『芸術』(1923-1928年)、『美術家労働組合』(1927-1934年)などを収録しています。また、『南ロシアにおける芸術』(1913-1914年)、『ソビエト芸術』(ウクライナ語、1928-1932年)などのキエフの出版物が収録されています。

なお、本セットに含まれる『アポロン』(1909-1917年)については、既存のコレクションと重複するため、山形大学で活用していただくこととなりました。

ウェブサイトを検索したところ、筑波大学附属図書館体芸図書館のマイクロ資料リストにこれが掲載されていました。先方から内容のリストをいただいて確認したところ、Pt. 1の単行書の部分65タイトルに当たることがわかりました。

センターが今回購入したセットは、現在、逐次刊行物の部分が未整理の状況ですが、必要な場合は、利用できるように対応します。[兔内]

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第60号(2013年春刊行予定)の原稿締切は、8月末です。ホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください(事前申し込みは不要です)。力作をお待ちしております。[長縄]

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

第32号は編集作業の遅れのため、現在のところ9月頃の刊行を予定しています。内容は以下の通りです。

ARTICLES

- Dariusz Kołodziejczyk Divided Sovereignty in the Genghisid States as Exemplified by the Crimean Khanate: "Oriental Despotism" à rebours?
Мария Маликова Издание переводной беллетристики в Советской России 1920-х годов по материалам внутренних издательских рецензий (из архива ленинградского кооперативного издательства «Время»)
Andrew Gentes Sakhalin as *Cause Célèbre*: The Re-signification of Tsarist Russia's Penal Colony

DISCUSSION

- Tomasz Kamusella The Change of the Name of the Russian Language in Russian from *Ros-siiskii* to *Russkii*: Did Politics Have Anything to Do with It?
Оксана Остапчук Русский versus российский: исторический и социокультурный контекст функционирования лингвонимов

SOURCES

- Nazira Nurtazina Great Famine of 1931-1933 in Kazakhstan: A Contemporary's Reminiscences

BOOK REVIEWS

- Victor Friedman Klaus Steinke and Christian Vosse, eds., *The Pomaks in Greece and Bulgaria: A Model Case for Borderland Minorities in the Balkans*
Elżbieta Smułkowa Shirin Akiner, *Religious Language of a Belarusian Tatar Kitab: A Cultural Monument of Islam in Europe*

第33号(2013年春刊行予定)の投稿は締切られ、現在審査を依頼しているところです。[大須賀]

会 議 (2012年6月～7月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2012年度第1回 7月15日

議題

1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
 - a. 2011年度活動報告 プロジェクト型公募共同研究・共同利用型個人研究
 - b. 2012年度活動状況 プロジェクト型公募共同研究・共同利用型個人研究
2. 共同利用・共同研究拠点の中間評価について
3. 共同研究員選考について
4. その他

◆ センター協議員会 ◆

2012年度第1回 6月20日

議題

1. 2011年度支出予算決算について
2. 2012年度支出予算配当(案)について
3. 特任助教の人事について
4. 研究生受け入れについて
5. その他

2012年度第2回 7月10日

議題

1. 教員の人事について
2. 2013年度特任教員(旧外国人研究員)候補者の選考について
3. その他

2012年度第3回 7月18日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. 部局間交流協定について
 3. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース129号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[宇山／大須賀]

- 5月16日 Boris Lanin（ロシア教育アカデミー）
5月25日 相川泰（鳥取環境大）
5月26日 上村明（東京外国語大）
5月31日 山下哲平（日本大）
6月4日 松村岳志（大東文化大）
6月16日 秋山徹（学振特別研究員・財団法人東洋文庫）、清水由里子（中央大）
6月30日 Igor Botoev（プリヤート国立大、ロシア）
7月3日 Victor Gorshkov（京都大・院）
7月4-6日 Ozan Arslan（イズミル経済大、トルコ）、David Brophy（オーストラリア国立大）、Dumitru Cotelea（バベシュ・ボーヤイ大、ルーマニア）、Elena Dabova（サンクトペテルブルグ国立大、ロシア）、Moshe Gammer（テルアビブ大、イスラエル）、Olexiy Haran（キエフ・モヒラ・アカデミー大、ウクライナ）、Barbara Junisbai（ピッツァー大、米国）、Charles King（ジョージタウン大、米国）、Maimaitei, Shieruzatei（オーストラリア国立大）、Maimaiti, Litifu（同）、Nikola Mirilovic（フロリダ中央大、米国）、Jeffrey Oppenheim（サンクトペテルブルグ国立大、ロシア）、Arsene Saparov（ミシガン大、米国）、Gulnaz Sharafutdinova（マイアミ大、米国）、Cory Welt（ジョージワシントン大、米国）、Yang, Cheng（華東師範大、中国）、Dareg Zabarah（フンボルト大、ドイツ）、青島陽子（愛知大）、安達祐子（上智大）、池田嘉郎（東京理科大）、石井明（東京大名誉教授）、石田淳（東京大）、出岡直也（慶応大）、井上貴子（大東文化大）、岩田賢司（広島大）、上垣彰（西南学院大）、植松正明（関西大）、応地利明（京都大名誉教授）、大串敦（大阪経済法科大）、大野成樹（旭川大）、木村崇（京都大）、久保慶一（早稲田大）、小泉忠之（共同通信社）、小沼孝博（東北学院大）、小林宏至（首都大学東京）、小森宏美（京都大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、澤江史子（東北大・院）、下斗米伸夫（法政大）、新免康（中央大）、杉本良男（国立民族学博物館）、鈴木絢女（福岡女子大）、高尾千津子（東京大）、田口喜一、田原史起（東京大）、田引勝二（ミネルヴァ書房）、唐亮（早稲田大）、中居良文（学習院大）、中溝和弥（京都大）、中村唯史（山形大）、野田仁（早稲田大）、兵頭慎治（防衛研究所）、平岩史子（ロシア極東連邦総合大）、廣瀬陽子（慶應大）、藤倉達郎（京都大）、前島訓子（椋山女学園大）、前田弘毅（首都大学東京）、丸山豊工（東北学院大）、三宅康之（関西学院大）、六鹿茂夫（静岡県立大）、村田雄二郎（東京大）、毛里和子（早稲田大名誉教授）、森元忠恒、山口昭彦（聖心女子大）、山根聡（大阪大）、湯浅剛（防衛研究所）、吉田修（広島大）、吉村貴之（東京外国語大）
7月14日 Ol'ga Berdnikova（ヴォロネジ大、ロシア）、Tamara Nikonova（同）、Sergei Zakharov（京都大）、岩本和久（稚内北星学園大）、風戸真理（国立民族学博物館）、小松久男（東京外国語大）、中村唯史（山形大）、宮川絹代（東京大）、森本一夫（東京大）
7月15日 塩原俊彦（高知大）
7月15-16日 今井昭夫（東京外国語大）、菊谷竜太（東北大）、高山陽子（亜細亜大）、杉本淑彦（京都大）、田村容子（福井大）、土田環（映画専門大学院大）、中野徹（近畿大）、濱田麻矢（神戸大）、

- 平松潤奈 (金沢大)、向後恵里子 (早稲田大)
 7月17日 Natal'ia Potapova (サハリン国立大、ロシア)
 7月20日 神竹喜重子 (一橋大・院)
 7月23日 岡本佳子 (東京大・院)
 7月28-29日 小松久恵 (大阪大)、瀧口順也 (龍谷大)、峯田史郎 (早稲田大)
 7月31日～8月7日 Yonson Ahn (フランクフルト大、ドイツ)、Vasilii Allenov (極東連邦大・院、ロシア)、
 Sam Bateman (シンガポール)、Bian, Wen-feng (北京大・院、中国)、Chu, Dongmei (中
 国辺疆史地研究、中国)、Gao, Shuqin (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、英国)、
 Angelo Ishi (武蔵大)、Anton Kostyuk (国立海事大、ロシア)、Tatjana Lipiainen (東フィン
 ランド大)、Raluca Nagy (早稲田大)、Minna Piipponen (東フィンランド大)、Glenda
 Roberts (早稲田大)、Igor Savin (南カザフスタン国立大)、Richard Shannon (釜山大、韓
 国)、Devika Sharma (デリー大、インド)、Zhang, Jiajie (ダーラム大、英国)、Bakytbek
 Zhumagulov (キルギス人ディアスポラ協会「Zamandash」)、井原伸浩 (神戸大)、柏崎千
 佳子 (慶応義塾大)、窪田順平 (総合地球環境学研究所)、佐藤隆広 (神戸大)、重政公一 (関
 西学院大)、土井康裕 (名古屋大)、古川浩司 (中京大)
 8月10日 上野一詔 (福島市)、佐藤健太 (負けねど飯館常任理事、飯館村)、吉田しのぶ (須賀川市)
 8月20日 Irina Kuznetsova (カザン連邦大、ロシア)

◆ 研究員消息 ◆

岩下明裕研究員は4月11～17日の間、新学術領域研究第1班「国際秩序の再編」に関わるABS会議への出席のため、米国に出張。また、6月3～5日の間、GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する、第12回BRITの打ち合わせのため、韓国に出張。また、6月14～18日の間、同GCOEプログラムに関するセミナー「Maritime Border Issues in Northeast Asia」への参加のため、米国に出張。また、8月25～31日の間、境界地域ネットワークJAPANに関わる、稚内・サハリンセミナーへの出席のため、ロシアに出張。

宇山智彦研究員は8月6～15日の間、新学術領域研究第4班「帝国の崩壊・再編と世界システム」に関わる現地研究調査のため、中国に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は5月9～23日の間、科学研究費研究に関わる国際会議での成果報告と出版打合せのため、米国に出張。また、6月16～23日の間、科学研究費研究に関わる講義及び資料収集のため、中国に出張。また、7月8日～8月7日の間、科学研究費研究に関わる国際会議での成果報告、出版打合せ、資料収集のため、米国に出張。また、8月25日～9月2日の間、科学研究費研究に関わる資料収集のため、米国に出張。

田畑伸一郎研究員は5月16～21日の間、新学術領域研究総括班「ユーラシア地域大国の比較研究に関する総括」に関わる国際会議での研究報告及び意見交換のため、ハワイに出張。また、5月28日～6月4日の間、ヘルシンキオフィス開所式準備、出席及び運営のため、フィンランドに出張。また、6月15～19日の間、「環オホーツク環境研究ネットワークの構築」に関わる、北東アジア地域協力発展国際フォーラムへの出席及び中ロ国境地域の調査のため、中国に出張。

松里公孝研究員は4月11～28日の間、新学術領域研究第2班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関わる講義及び資料調査のため、ロシアに出張。また、5月3～20日の間、同新学術領域研究に関わる現代中国における行政改革についての資料収集のため、中国に出張。また、6月17～25日の間、同新学術領域研究並びに「2012年度若手研究者インターナショナルプログラム (IIP) フェロー」に関わる研究会及び打合せのため、英国に出張。また、8月8～21日の間、科学研究費研究に関わる現地調査のため、ルーマニアに出張。

望月哲男研究員は8月4～17日の間、新学術領域研究第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」に関わる現地研究調査のため、中国に出張。また、8月26日～9月1日の間、同新学術領域研究に関わるトルストイ関連学会への出席のため、セルビアに出張。

シンポジウム翌日の小樽への小旅行は、日本文化と触れ合う機会にもなりました。



小樽市総合博物館運河館にて火おこし体験に集中する参加者達。「煙があがって、火がついたんだよ!？」と目を輝かせながらうれしそうに皆に報告してくれました。



能楽堂の舞台上で使用する太鼓、鼓、竹笛体験を楽しむ様子。ビデオで自身の映像を写してもらいながらたたき続けていました。ビデオ映像を母国で披露してくれることでしょう。



小樽の街並み見学後、北海道のミルクをつかったソフトクリームを試食し、運河にて一息(にっこり)。



能楽堂の舞台上にて。能を舞う時の扇子の使い方や、歩き方を体験しました。

by Abe

エッセイ 桜間瑛
長縄宣博

カザンの凶弾
7月19日のカザンにおけるテロの背景に関する一考察 p. 14
p. 18

2012年8月31日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 家田修
発行者 宇山智彦
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>